

日本鱗翅学会中国支部会報

第15号



ホシボシキチョウ (18・X・2013, 美祢市秋芳町青景)

2014年4月

日本鱗翅学会中国支部

日本鱗翅学会中国支部規約

2001年12月2日制定、2005年11月26日改正

第1章 総則

- (名称)
第1条 本支部は日本鱗翅学会中国支部と称する。
(目的)
第2条 本支部は支部会員相互の交流を図り、鱗翅目昆虫についての理解を広めることを目的とする。
(事務局)
第3条 本支部に事務局を置き、事務局を本支部の所在地とする。
(事業)
第4条 本支部はその目的を達成するために次の事業を行う。
(1)年1回例会(総会を含む)を開催する。
(2)年1回日本鱗翅学会中国支部会報を発行する。
(3)その他、適当な行事を行う。

第2章 支部会員

- (組織)
第5条 本支部は中国地区(広島・岡山・鳥取・島根・山口の各県)に在住する日本鱗翅学会会員をもって組織する。
(義務)
第6条 本支部の会員は住所(連絡先)、氏名などに変更のあるときは遅滞無く事務局に通知するものとする。

第3章 役員

- (種類)
第7条 本支部に次の役員を置く。事務局は支部長、事務局幹事、会計で構成する。
(1)支部長 1名
(2)事務局幹事 1名
(3)幹事 4名
(4)会計 1名
(選出)
第8条 支部長は日本鱗翅学会中国地区選出の評議員の中から互選し、総会において承認を得るものとする。
幹事(事務局幹事を含む)は第5条の各県の会員の中から推薦され(1名ずつ選出、自薦を含む)、総会において承認を得たものとする。選出方法は各県の裁量による。
事務局幹事は原則として支部長在住の県から選出された幹事がこれを務める。
会計は支部長が会員の中から推薦し、総会において承認を得たものとする。
(職務)
第9条 支部長は本支部を代表し、支部会務を統括する。支部長に事故があった場合、支部会員の資格を失った場合は、当該年度内の残任期間に限り他の評議員が支部長の職務を代行する。この場合総会の承認を必要としない。
事務局幹事は支部長を補佐し、支部運営上必要な業務を行う。
幹事(事務局幹事を含む)は例会の開催、会報の発行、その他支部運営に必要な業務の遂行に協力する。
会計は支部資産を掌握し、出納事務を行う。
(任期)
第10条 支部長の任期は原則3年とし、再任を認めない。
事務局幹事の任期は原則3年とし、再任を認めない。
幹事の任期は1年とし、再任を妨げない。
会計の任期は原則3年とし、再任を認めない。

第4章 例会、総会および会報

- (例会の内容)
第11条 例会は原則として支部会員による研究発表、調査・採集報告などで主に構成され、必ず総会を含むものとする。
(開催地)
第12条 例会は各会計年度内に少なくとも一回おこなうものとする。
例会は広島県、岡山県、鳥取県、島根県、山口県の順で開催するものとする。
(例会の運営)
第13条 例会は前条開催地の幹事が主催する。
(総会の運営)
第14条 総会は支部会員をもって構成する。
総会の運営は事務局が担当し、議長は支部長が務める。ただし、他の評議員または幹事による代行も可とする。
総会の議決は出席した支部会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
(会報)
第15条 会報は例会を主催した幹事が草稿を作成、編集する。
会報は事務局が発行し、例会開催翌年の4月末までに支部会員全員に配布する。

第5章 会計

- (経費)
第16条 本支部の経費は次に掲げるものをもってこれに當てる。
(1)支部連絡費(本部より交付) 200円/年/会員
(2)支部助成金(本部に申請)
(3)寄付金、その他
(資産の管理)
第17条 本支部の資産は事務局が管理する。
(決算)
第18条 本支部の会計状態及び収支決算はこれを総会で報告し、承認を得なければならない。
(会計年度)
第19条 本支部の会計年度は毎年1月1日に始まり、同年12月31日に終わる。
第6章 補則
(会則の変更)
第20条 本支部の会則を変更する場合は、総会の議決を経なければならない。
(委任規定)
第21条 この規約に定めるもののほか、本支部の運営に関して必要な事項が発生した場合は、評議員及び幹事との協議に基づき、事務局がこれを定めることができる。ただし、その事項は次回総会において承認を得なければならない。

附則

- この規約は、平成14年1月1日から実施する。
この規約は、平成18年1月1日から実施する。

(支部例会について: 第4回支部総会申合せ事項)

2003年から、学会員500円、非学会員1,000円とする。

参加費を支払って参加した非学会員には、例会の記事が記載された翌年発行の支部会報を一部送付する。

支部長挨拶

鳥取の今年の冬の平均気温は平年並みでした。心配されていた降雪量も少ない冬となりました。しかしこの原稿を書いている今、3月だというのに雪が降り、屋根は白くなってしまいました。どんな春が待ち受けているのでしょうか。

2014年が始まって既に4ヶ月になりました。皆様におかれましては、それぞれのテーマにそって、調査活動を開始し、あるいは計画を練られているかと思います。支部長として2年目となります。こうして会報を発行できるのも皆さんのおかげです。

さて、今年の日本鱗翅学会第61回大会は、10月25日、26日の両日にわたり、鹿児島市の鹿児島大学で行われます。この大会は今までの大会とは少し様子が違うようです。ポスター発表をメインにした大会となるようです。どのような大会運営がなされるか楽しみです。詳しくは、学会ホームページを見てください。この鹿児島大会を受けまして、11月に島根県で第16回中国支部例会を開催します。ここでは、研究発表と日本鱗翅学会第62回鳥取大会（鳥取市とりぎん文化会館で開催）の詳細について話し合いたいと思います。是非多くの方々の参加をお願いします。51名の力で支部を盛り上げていきましょう。

今年の活動成果をどんどんと支部例会に報告、寄稿していただけたら幸いです。

今年も皆さんの活躍・成果を祈念します。

中国支部 田村昭夫

中国支部第 15 回例会の報告

第 15 回中国支部例会は 2013 年 11 月 30 日（土），鳥取県立博物館で一般参加（地元紙に催し物案内を掲載）を含め 12 名の参加により研究発表と意見交換を行った。

[研究発表]（敬称略）

- ① 岡山県高梁川堤防（総社市）のシルビアシジミ 岡野貴司（岡山）

岡山県ではシルビアシジミは RDB リストには入っていないが，その生息地は減少の一途をたどっている。次回には RDB リストに入れる必要があるのでないか。

高梁川堤防のシルビアシジミは年に 3 回発生しているが，河川敷草刈りの方法により，発生数に変化がある。運動施設がある河川敷では，作業車で短く刈り込まれ，そのため発生数が少なくなる。手刈りの場合は，ある程度の草丈が残され，発生数が減少しない。

行政への働きかけが必要ではないか。一般参加者から，発生地ではロープが張ってあり，草刈りも配慮されているようだったという助言があった。

- ② “山口県で 2013 に記録した迷チョウについて” 後藤和夫（山口）

山口県では，2013 年にクロマダラソテツシジミ・カバマダラ・ホシボシキチヨウの 3 種の迷チョウが記録された。

クロマダラソテツシジミは 2009 年に見つかって以降 5 年連続となる。今年は 9 月に初認され，日本海側を北上し，島根・鳥取に達した。広島・岡山からの報告はない。ソテツの食痕等からもっと早い時期から発生していた可能性もある。

カバマダラは 8 月に周防大島で確認され，世代交代を繰り返した。天敵による攻撃が凄まじい。11 月中旬から発生数も少なくなってきた。

ホシボシキチヨウは定点調査の過程で 10 月に美東町で確認した。11 月には秋芳町でも確認した。11 月になり，温度低下の影響を幼虫が受けるようになってきた。

- ③ “鳥取県で初めてのクロマダラソテツシジミを採集（あわせて 2013 年の島根県の発生状況も）” 淀江賢一郎（島根）

淀江氏が所用で急遽欠席のため，レジメを見ながら田村が代読した。

後藤氏の話から，クロマダラソテツシジミが山口県で大発生したことが明らかになった。山口県のクロマダラソテツシジミはその後日本海を北上し，島根県に入り，10 月には鳥取県で発生（2013 年 10 月 2 日，2♂1♀，2 終齢幼虫）するに至った。島根県での経過は，レジメに詳しく報告されている。

田村が 11 月 23 日現在、境港市で発生していたことを追加報告した。

[総会]

総会は田村が議長につき、支部会報 14 号（20 頁）を発行、会計報告、鱗翅学会総会報告等を行った。現在の会員数は 51 名である。

自然保護委員会の各県メンバーは変わらないが、委員長を伊藤氏から田村に変更した。

今回の例会協議テーマは、2015 年の全国大会のことであった。会場・日などを決定した後、田村からシンポジウムを“（仮）環日本海諸国の鱗翅目”とし、内容について提案をし、話し合いをした。来年（2014 年）の例会で大会時の態勢について話し合うことにした。

全ての話し合いが終わったのは、午後 5 時前であった。

* 今回の例会開催案内を地元紙の新日本海新聞に掲載したところ、3 名の方が研究会に参加した。

[例会参加者] (順不同・敬称略)

田村昭夫、本田計一、後藤和夫、中井 衛、中西 淳、岡村元昭、岡野貴司、矢野重明

非会員：松井悠樹、大西季三世、平川 誠



参加者集合写真

前列左から：本田、中井、後藤、田村、矢野、後列左から：中西、松井（非会員）、岡村、岡野

岡山県総社市高梁川堤防のシルビアシジミ

岡野貴司（岡山県）

1 岡山県のシルビアシジミの現状

シルビアシジミは全国的に衰退が著しく、近年絶滅してしまった府県も少なくない。環境省自然保護局野生生物課のレッドデータブック（2012～2013年）では“絶滅危惧Ⅱ類”に位置づけられている。岡山県でも同様で、以前は県中～南部に多数の生息地が点在していたが、現在ではもう何ヶ所も残されていない。しかし岡山県生活環境部自然環境課のレッドデータブック（2010年）では“留意”的段階にすぎない。それによると“…省内では瀬戸内沿岸部から吉備高原地域にかけての広い地域から確認されている。現状では局地的ながら比較的安定した生息地が維持されている。”とある。しかし私の知る限りではどの生息地も極めて狭く、また個人的な草刈りによってかろうじて環境が維持されている所が多く、“比較的安定した生息地”とはほど遠い状態である。

ここで紹介する総社市高梁川堤防の生息地は規模も大きく、おそらく岡山県最後の楽園となるのではと思われる。筆者は1980年代後半から観察を続け、岡野（2013）で報告した。今回この報文を基調として、その後の知見や2013年の発生状況を加筆してまとめてみた。

2 生息地

観察地は総社市井尻野地区と同市下原地区の2ヶ所である。

井尻野地区の生息地は、高梁川左岸、総社大橋北の車止めから国道180号線に合流するまでの約1.9kmである。この国道合流付近にも車止めがあり、したがって交通路としての価値はない。南側の半分は舗装されているが、北半分は未舗装であり、この未舗装部分が生息地の中心となっている。

下原地区的生息地は、総社大橋南の高梁川右岸と高梁川とその支流である新本川との背割堤防である。ここにも堤防の入り口に車止めがあり、ここから突き当たりまでの約1.1kmである。堤防の交通路としての価値はまったくない。



図1 井尻野地区（南側の車止め）



図2 下原地区（入口の車止め）

3 ミヤコグサが生育できる理由

この両生息地の周辺の堤防にも同様の草地が広がっているが、シルビアシジミは見つかっていない。ミヤコグサがないからである。ただし両生息地でシロツメグサ、ウマゴヤシ、コマツナギなどミヤコグサ以外の食餌植物が利用されているかどうかは確認していない。

なぜミヤコグサが両生息地に生育し、自動車道として利用されている堤防には見られないのか。両生息地をよく観察してみるとミヤコグサの生え方に特徴があることが分かる。堤防の道端から路肩の部分に多く、堤防の斜面ではほんの僅かか、あるいはまったく見られない。道端や路肩は乾燥していて地面も固く、植物の生育環境としては好ましい場所ではない。ミヤコグサは丈の短

い草地では生育できるが、他の植物が茂り始めると消えていってしまう。この道端～路肩はミヤコグサにとって好環境であり、そこからこぼれ落ちた種が堤防の斜面で発芽しているのである。この斜面には多種多様の植物が茂っていて、ミヤコグサが勝ち残れるような場所ではないが、絶えず行われる草刈りがかろうじてミヤコグサの生育環境を維持してくれているのである。

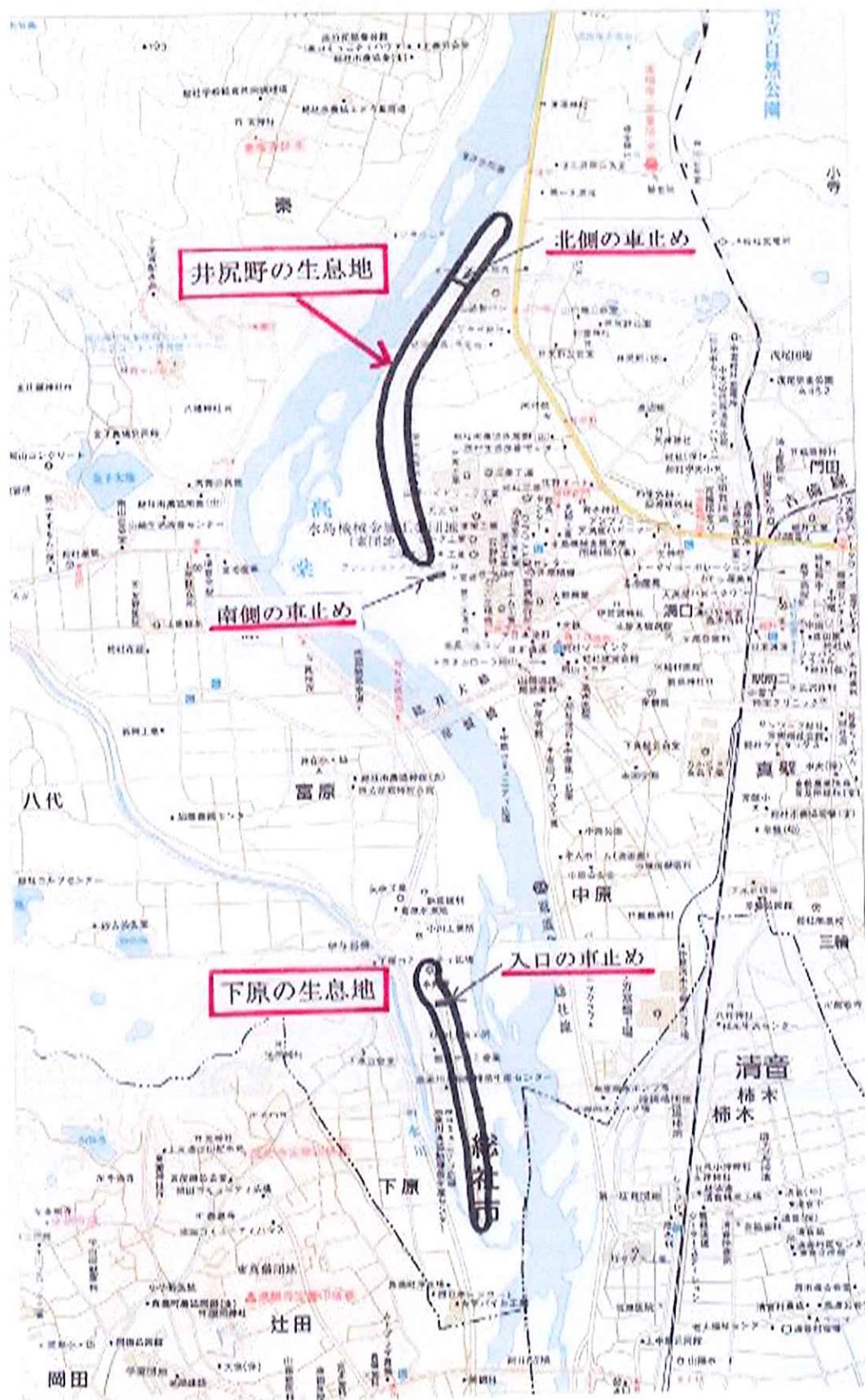


図3 2ヶ所の生息地周辺の地図

4 草刈りの状況

この地区の草刈りとシルビアシジミの発生期は表1のとおりである。

発 生 期		草 刈 り	
1化	4月下旬～5月上旬	1回目	5月下旬
2化	6月下旬～7月中旬	2回目	7月上旬
3化	9月中旬～10月（一部4化も）	3回目	9月中～下旬

表1 シルビアシジミの発生期と草刈りの時期

3化から生まれた幼虫は越冬するが、一部は10月に4化として羽化しているのではないかと思われるが十分に調査できていない。

3化による産卵、およびその幼虫の成育状況と、3回目の草刈りのタイミングが越冬幼虫の個体数を決定する。越冬幼虫の数を増やすためには3化の♀の羽化直後に草刈りが入るのが理想であると思っている。回復し始めたミヤコグサへの産卵が可能であるからである。しかしこのタイミングがうまくいかないと翌春の極端に減少してしまう。特に♀羽化前か産卵直後に草刈りが入ると最悪の状況になる。

年3回という草刈りの回数がシルビアシジミにとって好条件を生み出していると思っている。高梁川の支流である新本川や小田川はこのシルビアの生息地の近くで本流と合流しているが、草刈りが年2回であるために茂りすぎてミヤコグサが生き残れる環境ではない。ミヤコグサがほとんど見られないである。

では井尻野・下原地区の生息地は安泰かというとそうではない。草刈りの方法が変わったことと、未舗装部が舗装されたことがシルビアシジミを圧迫している。以前は人による手刈りであったため、生息地全体の草刈りに数日を要した。シルビアシジミは草刈りが実施されたエリアからまだ行われていないエリアに避難することができた。しかし2006年頃から草刈り専用の車両が導入され、一日で一気にしかも極端に短く刈られるようになってしまった。そのためシルビアシジミは避難することができなくなり、また卵・幼虫・蛹が根こそぎ持っていくかれるようになったのである。ミヤコグサの回復にも時間がかかるようになった。井尻野地区ではこの草刈り専用の車両導入以降、生息数が激減してしまった。下原地区では1990年代中頃に舗装されたため、生息地が著しく狭められてしまった。個体数の減少は多様な遺伝子が失われることもあり、将来受精率が低下するなどの悪影響が出るのではないかと心配している。2013年の草刈りは次のとおりである。

井尻野地区 一 河川敷のグラウンドの利用者が多いためか、草刈り専用車両による一斉で徹底的な草刈りが行われた。2012年秋は特に極端に短く刈り取られてしまつたため、翌春の個体数が激減した。今年度（2013年度）の秋は比較的やさしいやり方であったので安心している。

下原地区 一 河川敷の利用がほとんどないためか草刈り専用車両ではなく、作業員の手作業で行われている。そのため比較的良好な環境が維持されている。アスファルトの劣化が進んで路肩のミヤコグサは回復傾向にあるが、帰化植物であるナヨクサフジの侵入が新たな脅威になっている。

5 訪花植物

今までミヤコグサ、ヤハズソウ、コマツナギ、ツルボ、ヒメジョオンでの吸蜜を観察することができた。特に個体数の増す秋にはツルボに多数のシルビアシジミが群がっている光景を目撃した。2013年の夏には、堤防縁のオオニシキソウ（帰化植物）を訪れている複数の個体を目撃した。過度の草刈りは食餌植物だけでなく訪花植物の喪失をも意味する。成虫が生息地をどの程度離れることができるかがカギであるが、あまり外へは出ていないと思われる。今までの観察では堤防から20mほど離れたヒメジョオンでの吸蜜が最も離れたケースであった。草刈りが行われると成虫はまったく見られなくなるのだが、どこへ行ってしまうのであろうか。これも今後の調査の大変な課題である。

6 2013年のシルビアシジミ発生状況

1化（5月17日観察）

両地域ともミヤコグサは多いが、シルビアシジミは少なかった。ルートセンサス法で調査して両生息地とも10数頭程度であった。前述の通り、昨年秋の徹底した草刈りによる越冬幼虫の減少がその原因と思われる。

2化（7月1日、8日観察）

井尻野地区は極めて少なく、数頭目撃できた程度である。逆に下原地区では多く、比較的普通に見ることができた。なぜ両地域にこのような差が出たのかは分からぬ。もっとも夏は個体数が減少する傾向にある。ミヤコグサも衰退するので、他の食餌植物で命をつないでいる可能性がある。

3化（9月9日観察）

両地区とも多数発生していた。生息地のどのポイントに立っても数頭目撃できた。また下原地区では車止めを越えた北側の堤防外側の草地でも見つけることができた。この地区での確認は初めてであり、勢力の拡大と考えている。条件さえ整えば分布を広げることができる事を示している。



井尻野地区のシルビアシジミ（図4-左、図5-右）
いずれも2009年5月1日 岡山県総社市井尻野 撮影者：藤本徹哉

7 保護に向けて

岡山県内の生息地が次々と消えていく中で、この両生息地は極めて重要なものである。シルビアシジミとその生息地を保護するためには次の4点が重要であると考えている。

- ① 年3回の草刈りは維持する。ただし広範囲を一斉に行うのではなく、シルビアシジミの避難地が確保できるような方法を採用する。
- ② 極端に短く刈るのではなく、草丈10数cm程度を残す。
- ③ 両生息地とも車止めは維持し、車などによる人為的な攪乱は避ける。
- ④ 井尻野地区の未舗装部分はそのまま残す。可能なら下原地区の舗装部分を剥がしてもとの状態に戻す。

シルビアシジミは全国的に減少が著しく、そのことが逆に愛好家の人口を高めてクロツバメシジミのようなブームが起こっている。採集圧の急激な高まりが、シルビアシジミをより厳しい状況に追いやっているケースもあると聞く。2013年10月の日本鱗翅学会中国支部例会において“堤防の草刈りで実施者と話し合って生息エリアをピンポイントで残したり、やや長めの草刈りをしたりしている例がある”との意見をいただいた。継続的な観察でデータを蓄積していく、最適な草刈りの時期と方法を提言していかなければならないと思っている。また、岡山県のレッドデータブックにおいて適切な評価がなされるように働きかけていくことも重要である。

引用文献

岡野貴司 (2013) 2012年 総社市高梁川堤防のシルビアシジミの現状. みちしるべ (49) 473-475.

山口県で2013年に記録した迷チョウについて

後 藤 和 夫 (山口県)

■ はじめに

2013年は春先から異常なまでに暖かく、ギフチョウや1化目となるアゲハチョウ類や普通種などは、のきなみ不作であった。この傾向は夏場になっても大きく改善することはなかった。

夏場の猛暑は全国各地で最高気温を更新した。これは県内も同様であったが、台風は県内を含め中国地方は影響を与えることはなかった。ただ大雨による水害は萩市(須佐)と山口市(阿東)に甚大な被害をもたらした。この様な状況下でカバマダラ、クロマダラソテツシジミ、ホシボシキチョウが記録された。これらの3種は会報山口のむしなどに報告中である。

1. クロマダラソテツシジミ *Chilades pandava* (Horsfield, [1829])

2009年に県内で初めて発見されて以来、4年続けて記録されていた。2013年は9月5日が初見日であった。その後の追跡調査から、既に県内に広く分布拡大していることが明らかになった。

5年目の調査は12月初めまで続けたが、これまで記録の少なかった内陸山間部(旧楠町、旧熊毛町、旧豊田町、旧秋芳町、旧徳地町、旧小郡町など)から発見された。

過去の調査で越冬した例は無いが、5月頃に芽吹きしたと思われる葉に食嗜痕と見られる形跡があったことで、5月、6月頃にどの様な状況であるのか注視する必要性を感じた。

2013年のデータや生態など観察記録は既存の山口のむし誌上で詳細を報告済みである。

図-1 クロマダラソテツシジミ確認地点 ●



・参考文献

川元 裕 (2010) 2009年の山口県におけるクロマダラソテツシジミの発生状況. 山口のむし.

稻田博夫・山本弘三 (2011) 周防大島町のクロマダラソテツシジミ発生状況(2010年). 山口のむし.

後藤和夫 (2012) クロマダラソテツシジミ 2011年の動向. 山口のむし.

福田竹美・五味 清 (2013) クロマダラソテツシジミ 2012年の動向. 山口のむし.

2. カバマダラ *Danaus chrysippus* (Linnaeus, 1758)

山口県でカバマダラの記録は1957年の防府市が最初である。それから1999年まで4例の単発記録(内1968年の記録は詳細が不明)がある。山口むしの会発足後、2009年に周防大島町で本種が一時発生し、その詳細データは稻田・山本(2010, 2011)で報告されている。

続けて2010年には光市で一時発生したのは記憶に新しく、その詳細についても福田・五味(2011)でまとめられた。どちらも発見から冬季まで世代を繰り返したが、越冬して代を重ねることはなかった。

それから4年目の2013年8月に周防大島町の前回と同じ場所でトウワタにまとわりつく本種が確認され、その個体も♀であることから世代を繰り返した。観察したところ、ハチやアリなどの天敵により幼虫や卵が襲われるため、幼虫を保護するため一部を自宅の飼育容器で育てるなどした。観察のため、その様な努力をしたこともあり、現在三世代目に入っている。分布の拡大は4地域になったが、11月半ばから気温も10度を下回り始め、成虫ものきなみ数が少なくなっている。

また当地で発見したことから、過去記録のある地域を数ヶ所調べたが未発生で、県外の愛媛県に確認したところ、一ヶ月後になって四国でも発生している旨、連絡が入ったので付記しておく。

図-2 カバマダラ確認地点 ●



・参考文献

福田竹美・五味 清 (2011) 光市におけるカバマダラの発生. 山口のむし.

稻田博夫・山本弘三 (2010) 周防大島町でカバマダラ発生. 山口のむし.

稻田博夫・山本弘三（2011）周防大島町でカバマダラ発生(続報). 山口のむし.
山本弘三（2014）周防大島町でカバマダラ発生(2013年). 山口のむし.

3. ホシボシキチョウ *Eurema brigitta hainana* (Moore, 1878)

発見は、定点調査をしている過程で確認したものである。10月12日に桂木山周辺の調査を終え、この日最後にと立ち寄った美東町赤郷地区で16時30分頃に発見した。これが山口県初記録となった。

10月のこの時期になると、昆虫の活動も16時を過ぎると非常に弱まるが、なにも飛ばない中でキタキチョウより一回り小さな蝶が視界に入った。当地では久しく記録の無いツマグロキチョウかと思い暫く、その後を追い回したが、近づくと意外に敏感で直ぐに飛び立ちシャターを切ることができない。捕獲なら一瞬で済むのだが結局10分以上も追い回したが、ファインダーで覗くと後翅の斑紋が初めて見るもので、確実に同定するため捕獲した結果、ホシボシキチョウだと判った。確認後30分に渡り付近を調べたが、ヤマトシジミやベニシジミが飛び立つ程度でこの日を終えた。

発見後、11月半ばにかけて追跡調査を実施したところ、秋芳町青景でも一時発生していることを掴んだ。また過去の調べで食草のカワラケツメイが自生している宇部市、徳地町、阿東町、豊浦町、豊田町などに出かけたが確認できなかった。ただ美東町と秋芳町は発生した場所のため、秋吉台以外の四ヶ所の自生地も数回訪れた。新たな食草探しもこの機会に実施したが、新展開はなかった。11月の半ばを過ぎて美東町の絵堂地区から新たな自生地を探し出したが、確認できなかつた。

図-3 ホシボシキチョウ確認地点



本種は東南アジアに広く分布する種で、台湾が北限になっている。日本では南西諸島から沖縄、奄美諸島、九州本土から本州の和歌山県でも記録されている。そのほか多くの確認例があると思うが、中国地方では初めてのことになると推察する。過去の事例からカワラケツメイで一時発生を繰り返すが、継続性は日本国内では見られず、1955年の発見から58年が経過し多くの記録が

あるにも関わらず、未だに偶産種の域を出ていない。観察の結果、本種は耐寒性の弱いことが明らかになった。県内ではウスイロコノマチョウの事例とほぼ同様である。

今回県内のほぼ中央部の二ヶ所で発生したことについて、どのような経過で飛来してきたのか、これから冬季を迎えるようになるのか、次年度以降はどうなるのかなど、関心が持たれる。また調査から感じたことだが、本州ではまだ記録は少ない要因として、近縁のキタキチヨウやツマグロキチヨウを意識して採集する同好者は非常に少ないと加え、初めからキタキチヨウだとの思い込みから見過ごされていることは多いにあると考えられる。現に同属のキチヨウ(ミナミ)とキタキチヨウとの区別についても、通常の知見では現地での同定は困難と思われる現状もあるようで、このような普通種でも深く関心を示すことが発見の重要なポイントと思われる。

そのほか生態など調べた結果については、別途報告中（山口のむし、月刊むし）を参照。

・参考文献

後藤和夫 (2014a) 山口県で発生したホシボシキチヨウ. 山口のむし.

後藤和夫 (2014b) 山口県で2000年以後に記録された偶産蝶類について. 山口のむし.

■ おわりに

今回3種の迷チョウの記録を報告するにあたり、第一発見者で山口むしの会の会員でもある中西 淳氏、山本弘三氏には貴重な資料の提供もお受けした。同じく会員の稻田博夫氏をはじめ協力いただいた会員諸氏ならびに関係の方々にも、誌上をお借りして厚くお礼申しあげる。

生態写真



図-4 クロマダラソテツシジミ♂



図-5 カバマダラ交尾



図-6 ホシボシキチヨウ♂



図-7 クロマダラソテツシジミ幼虫



図-8 カバマダラ幼虫



図-9 ホシボシキチヨウ幼虫

鳥取県で初めてのクロマダラソテツシジミを採集 (あわせて 2013 年の島根県の発生状況も)

淀江賢一郎(島根県)

鳥取県では初記録となるクロマダラソテツシジミ *Chilades pandava* (Horsfield, [1829]) を採集したので報告する (なお、詳細は山陰むしの会会誌「すかしば」61号に報告予定)。

鳥取県境港市外江町補岩寺近くで、2013年10月2日、2♂1♀、2終令幼虫を採集した (10月2日に「月刊むし」に投稿、514号に掲載)。外江町の民家駐車場に植栽されていたソテツに大量の食痕があるのを見出した。チェックしたところ、羽化直後の1♂をまず発見し、続いて奥まったところでまだ翅が伸展しきってない♀の交尾個体を発見した。食痕はやや古く葉は硬化を始めていたが、2終令幼虫も発見できた。蛹を探そうと毛の部分を割り箸でくつてみたが見いだせなかった。しかし、食痕量から見て相当数の蛹があるように思われた。境港市ではほかに、市役所、市民公園、境高校、お台場公園、上道小学校などでソテツをチェックしたが卵・幼虫・食痕はなかった。ただ中央公園でソテツのチェック中に飛び出したシジミは本種のように思われた。

2013年、筆者の調査の概略

(参考: 8月31日, 9月13日, 10月9日, 10月15日に大型台風通過, 11月21日寒波)

- 2013年9月20日　益田市須子町, 終令幼虫32, 若令29個体採集。(終令は翌日には前蛹化し, 10月1日にすべて羽化)。岡義人氏同行。
- 2013年9月21日　松江市鹿島町恵曇神社でソテツの新芽を餌用に持ち帰る(後日, 卵が多数産卵されていたことに気付く)。
- 2013年9月29日　萩市, 1終令幼虫採集(10月13日に羽化)。
- 2013年9月29日　益田市高津町, 3終令幼虫採集(10月12日羽化)。
- 2013年9月29日　大田市温泉津町 JR 温泉津駅, 多数の卵・若令幼虫。終令幼虫8個体を採集, 10月11日に羽化。
- 2013年9月30日　大田市温泉津町, 1♀が産卵中(1~2分で10個余), 多数の卵, 若令幼虫, 終令幼虫。坂田国嗣氏同行。
- 2013年9月30日　江津市江津町 JR 江津駅, 多数の若令幼虫(40個体採集)。10月15日に大半が羽化。
- 2013年9月30日　出雲市大社町出雲大社境内, 数週間前と思われるかなりの数の食痕。
- 2013年10月1日　松江市鹿島町恵曇神社, 複数の♀, 少数の終令幼虫, 多数の若令幼虫・卵。坂田国嗣氏, 板垣治氏同行。
- 2013年10月1日　松江市鹿島町恵曇小学校, 多数の終令幼虫がいた(葉は硬化し始めていた)。10個体採集。10月11日羽化。
- 2013年10月1日　松江市末次本町(松江市役所), 10終令幼虫採集(葉は硬化し始めていた。新芽も出始めていた)。8個体が寄生。
- 2013年10月2日　境港市を調査後に帰路、松江市八東町(大根島)八東小中学校, 卵多数。
- 2013年10月4日　大田市川合町吉永周辺5カ所で, 1♀, 多数の卵, 若令幼虫。終令幼虫14個体採集。このあたりは全域で大発生中。
- 2013年10月5日　大田市大田町大田, 駅前子どもセンターは多数の成虫, 卵, 若令・終令幼虫。終令幼虫を27個体採集。10月14日に大半羽化。大田市大田町内ではチェックしたほぼすべてのソテツに食痕, 卵, 幼虫を見出した。司法書士事務所, スカイホテル、市役所駐車場ほか。
- 2013年10月7日　松江市美保関町北浦北禅寺。終令幼虫1個体採集(10月27日羽化)。
- 2013年10月8日　出雲市平田町美談町, 建設会社のソテツの新芽に多数の卵あり。20個体採集(11月1日から羽化)。
- 2013年10月8日　大田市大田町長久, 介護施設ユエイングのソテツに新芽に多数の卵あり。

- 2013年10月10日 境港市外江町で2♂1♀採集。1蛹（蛹は羽化せず）。
- 2013年10月12日 松江市八雲台松江南高校，2♂採集。ほかに♀も目撃。多数の食痕。
- 2013年10月12日 松江市末次本町松江市役所，6♂5♀採集，幼虫も多い。
- 2013年10月14日 倉吉市小鴨川沿いの建設会社のソテツのチェック中，本種らしいシジミチョウ1個体が飛び去る。食痕はなし。
- 2013年10月26日 松江市鹿島町鹿島東小学校，1♂2♀採集。多数の古い食痕があった。
- 2013年11月2日 松江市比津が丘の自宅のツワブキの花に，2♂1♀訪花中。1週間いた。
- 2013年11月4日 大田市長久町介護施設ユーディング，雨の中で終令幼虫15個体採集（暖房に入れて飼育し11月24日から羽化）。
- 2013年11月23日 好天だったので、松江市（市役所と鹿島東小学校）で成虫を探したが発見できなかった。

いただいた情報

岡 義人氏：出雲市馬木町光明寺（馬木不動尊），10月21日，100個体以上の終令幼虫（11月5日から羽化）。出雲市下横町出雲農林高校，10月21日，3終齢幼虫採集（11月4日羽化）。

板垣 治氏：米子市富益町，10月6日，新鮮な1♂と4蛹採集。

中井博喜氏：米子市大篠津の病院，10月10日，5～10本のソテツ。100頭以上の幼虫を確認。驚いたのは産卵された卵の数で、優に1000卵以上は産卵。それでもなお複数の♀が産卵を続けていた。

インターネット情報

10月2日に、山陰むしの会の近郊会員30人余に、一斉に以上の情報をすべてをメールで連絡した。

10月2日に、坂田国嗣氏が、自身のブログ「てふ（ちょう）の日記」に公開。

10月7日ごろから“むしオーケーション”に、100個体以上の“鳥取県初記録”と称する三角紙標本が出品された。

謝辞：調査に同行され、データの発表を許された岡義人氏、坂田国嗣氏、板垣治氏、中井博喜氏に厚くお礼申しあげる。



写真1 最初に発見した羽化直後の♂



写真2 硬化しつつあるソテツにしがみつく幼虫

いずれも2013年10月2日境港市外江町、筆者撮影。

山口むしの会は2013年春季より無期限でギフチョウの卵から成虫に至る全ステージ、及びカンアオイ類の採集自粛をお願いすることにしました。

昆虫愛好者の方々には趣旨を理解しご協力をいただいてきました。2014年度も引き続き自粛をお願いすることになりますが、宜しくご理解のほどお願いいたします。

山口県のギフチョウ採集自粛のお願い

山口むしの会保全委員会

山口むしの会では、山口県のギフチョウが危機的状況にあるとの認識に達し、全国同好の皆様に2013年春季から無期限で、山口県内での卵から成虫に至る全ステージ、およびカンアオイ類の採集自粛をお願いすることとしました。

本県のギフチョウは、以前はさほど珍しい種ではありませんでしたが、自然環境の人為改変や植生遷移が進み、最近では地域ぐるみで生息環境の保全活動に乗り出している一部地区を除いて個体数が激減し、かつての多産地でもめったに見かけることができなくなりました。

このような状況下で、日本の西限地域という地域特性からか、毎年採集者が殺到して採集圧を加えるとともに、生息地域の住民や保全活動に取り組む方々との摩擦が顕在化しています。

そこで、まずは本県ギフチョウの窮状を訴え、同好諸氏の賢慮に期待して今後の推移を見極めるのが現状では最善と判断したものです。

採集圧のみを抑制しても個体数が回復する保証はありませんし、法的根拠を伴わぬ採集“自粛”では決定的な拘束力となり得ないことも承知しています。しかし、何の法的権限もないのにこのようなことを皆様に要請せざるを得ない現状をご賢察ください。

やがて個体数の回復が見込める見極めがつけば自粛を解きたいと考えていますので、趣旨をご理解の上ご協力をお願いします。しかし、今後の状況次第では保全活動と法的拘束力を伴った措置をセットで行政に働きかけることになるかもしれないほどの状況にあることもご認識ください。

最後に、山口県のギフチョウは、せっかく来県されても成虫を見ることすら叶わないことも珍しくありませんし、地元住民が保全活動をしている地域での採集行為はもっての外です。皆様の冷静で賢明な思慮を期待します。

2014年3月吉日
山口むしの会

鳥取県倉吉市の30年間(1981年～2010年)の気温変化

田 村 昭 夫 (鳥取県)

昨今“地球温暖化”という言葉をよく使われるが、はたして“温暖化”と言われるほど温度変化があるだろうか。たしかに倉吉市でも、ナガサキアゲハやイシガキチョウ、クロメンガタスズメ、イチジクヒトリモドキなどの南方系鱗翅類を目にするようになった。はたしてこれが温度と関係するのか。少々考えてみたい。

筆者は、日本鱗翅学会第56回大会で“鳥取県倉吉市の南方系鱗翅目の動向について”というテーマで平均気温の推移を下に、クロメンガタスズメ等の南方系鱗翅目の動向を発表した(田村, 2009)。このときには平均気温と冬期の12月から2月の温度を示しただけであった。ただ平均気温の推移だけでは鱗翅目の動向はよく分からぬのではと考え、今回1981年から2010年までの30年間の最低気温を10年間ずつに区切って考えることにした。データは全て倉吉市にあるアメダスのデータである。

1981年から2010年までの30年間という区切りは、気象庁が最新の平年値を算出した期間である。現在の平年値の数字は、この30年間の平均値である。したがって、筆者もこの30年間のデータを使うことにした(倉吉市の記録があるのは1979年以降である)。

図1は1981年～2010年までの30年間の平均気温並びに最低気温、1～8月までの最低気温の推移である。最低気温を選んだ理由は、平均気温は高温と低温を併せたもので、南方系鱗翅類の生息を見るには適さないと考えたからである。9月以降を掲載していないのは、気温が次第に低下し、世代交代に適さないと考えるからである。

鳥取県倉吉市のアメダスポイント：北緯35度28.3分、東経133度50.5分、標高8m

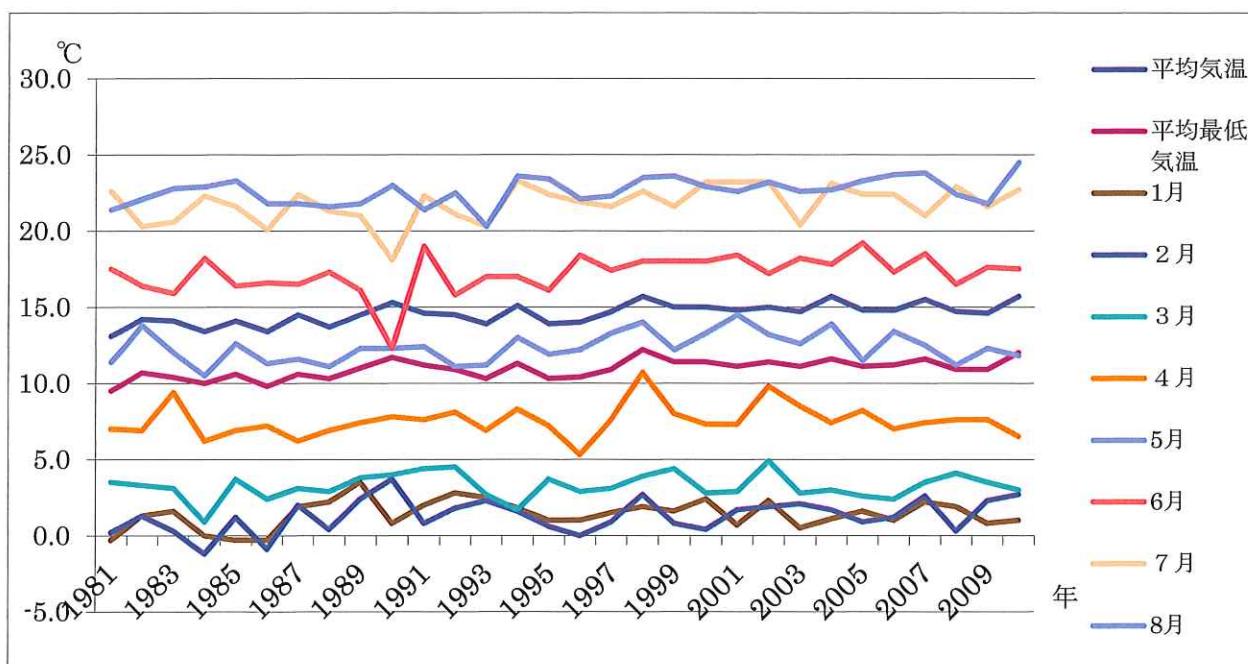


図1 1981年～2010年までの最低気温の推移

図1からは、なんとなく温度が右肩上がりの傾向にあるように感じられる。1～4月の最低気温は低く、耐寒性を持たない種は生息できない。筆者が観察していたクロメンガタスズメは、最低気温が15°Cを下回るようになると徐々に死んでいった(田村, 2011)。15°C以下になるのは、当地では10月中旬以降である(ちなみに10月の最低気温は12.5°C)。15°Cを目安にすると、耐寒性を持たない南方系鱗翅類が倉吉市で活動できるのは6月から9月(遅くとも10月上旬)までであろう。

図2はこの30年間を10年ごとに区切ったものである。

要素	平均気温	平均最低気温	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
1980年代(℃)	14.0	10.5	1.0	0.9	3.1	7.2	11.9	16.3	21.0	22.3
1990年代(℃)	14.6	11.0	1.9	1.2	3.4	7.7	12.5	17.5	22.0	22.6
2000年代(℃)	15.0	11.3	1.3	1.7	3.3	7.7	12.7	17.8	22.3	23.1
30年間(℃)	14.6	10.7	1.2	1.1	3.0	7.3	12.1	17.2	21.8	22.5

図2 10年ごとの最低気温の推移

30年間の総体的なグラフでは見えなかった温度の動きが、10年の単位で区切ると全体的に温度が上昇傾向にあることがうかがえる。各年代とも4月～5月、5月～6月にかけての上がり幅が大きいことが分かる。

クロメンガタスズメの定着が、15℃が目安ではないかと前述したが、5月～6月がその境目となり、この辺りから徐々に倉吉市で侵入・定着が仕始めるのではないかと考えている。

現在倉吉市を含めた鳥取県中部地区で確認されている南方系鱗翅目は、ナガサキアゲハ、ムラサキツバメ、イシガケチョウ、ツマグロヒヨウモン、クロコノマチョウ、ウスイロコノマチョウ、クロメンガタスズメ、イチジクヒトリモドキの8種類であり、これらは1972年以降、県内で新たに確認されてきた。鳥取県中部地区での定着は、ナガサキアゲハ、ツマグロヒヨウモン、クロコノマチョウで確認されており、イシガケチョウの発生は年次ごとに変動が多い。2000年代に確認されたクロメンガタスズメ、イチジクヒトリモドキは確認される季節が限られている。

鳥取県中部地区に入ってきた南方系鱗翅類を種ごとに並べてみると表のようになる。

ナガサキアゲハ	1978年採集、1981年春型確認、1992年大発生。定着。
ツマグロヒヨウモン	1966年、1981年採集、1989年大発生、1993年5月採集。定着。
イシガケチョウ	1976年、1979年採集、1991～1994年大発生、1993年4月、1994年5月採集、2003・2004・2009年4月、3月、4月に採集。越冬可能。
ムラサキツバメ	1991年に採集。
クロコノマチョウ	1972年、1978年採集、1985年8月採集、1990年7月採集、1994年4月採集、2004～2005年7月採集、定着。
クロメンガタスズメ	2004年幼虫採集、2009年5月成虫採集。以降毎年幼虫を確認。
イチジクヒトリモドキ	2007年秋に採集。2008年6月発生。以降毎年のように幼虫を確認。
ウスイロコノマチョウ	1978年よりたびたび確認。発生はせず。

図3 鳥取県中部地区に入ってきた南方系鱗翅類

定着しているナガサキアゲハ、ツマグロヒヨウモン、イシガケチョウ、クロコノマチョウの4種類は耐寒性があり、数の多少があるが毎年発生している。耐寒性のないクロメンガタスズメやイチジクヒトリモドキは定着できない。これら2種は年ごとの気温変動や周辺地域の温度変動に大きく影響を受けると考えている。

1990年代と2000年代の最低気温の差は数字的見ると大きな差はないが、クロメンガタスズメやイチジクヒトリモドキにとつては何らかの違いがあるのだろう。

僅か30年間の比較なので“温暖化”という結論を出す程のデータではないが、そのような傾向はうかがえるデータである。今後どのような種が北上してくるのか気をつけていきたい。

引用文献

- 田村昭夫（2009）鳥取県倉吉市の南方系鱗翅目の動向について. 日本鱗翅学会第56回大会（名古屋大会）プログラム・講演要旨集, 21.
- 田村昭夫（2011）倉吉の気象～クロメンガタスズメには倉吉の11月は寒い～. ゆらぎあ（29）27-28.

日本鱗翅学会 2013 年評議員会情報

田村 昭夫（鳥取県）

(開催日 2/22@東京大学総合研究博物館)

大会ローテーション

2014 年鹿児島大学、2015 年鳥取、2016 年日大藤沢キャンパス、2017 年東北。

会誌「蝶と蛾」の電子化へ

2015 年には“蝶と蛾”は電子化を進める。遅くとも 2016 年度には。紙媒体希望者には別途料金で配布する。経費削減のため。今年度は従来通り。

支部助成金

中国支部への 2014 年度支部助成金は、要求通り (39,650 円) が承認された(2/22)。

会費

会費の値上げについては現状を維持することとなった。また、学会の将来を担う若手会員の加入促進を目的とした会費軽減処置として、30 歳 (25 歳から 30 歳へ変更) 以下の「通称—若手会員」については 2015 年度会費から半額とし、入会金も免除することとなった。なお、年齢は当該年度の 1 月 1 日時点での満年齢とする (2/22)。

会員獲得について

2014 年のインセクトフェア（東京都大手町）に有志として参加し、持参した“日本産チョウ類の衰亡と保護（第 6 集）”5 冊が全て売り切れた。そのときに 5 名の新入会員を得た。今年度は学会として参加し、会員を積極的に勧誘する。関連資料、文献を発表する。支部の発行物も持参可能。

若手会員については、上記のような対策をとる。

大会における様々な年代に焦点を合わせた企画（小集会的なものでも可）を実施する。

⇒鳥取大会での企画を考えていく。-実施の可能性を探る。

自然保護委員会

- ・ ツシマウラボシシジミ保全に関する環境大臣等に要望書提出。-シカによる過剰食害により、ツシマウラボシシジミが絶滅寸前。
- ・ 沖縄県高江地区に対する米軍ヘリパッド建設についての環境に対する要望書の提出検討。
- ・ リニア中央新幹線建設に関わる残土処分地の問題。昆虫に対する影響大。

鹿児島大会について

- ・ 2014 年 10 月 25 日（土）～26 日（日）
- ・ 鹿児島大学郡元キャンパス農学部農・獣医共通棟にて。懇親会は教育学部生協食堂。
- ・ 大会参加費（正会員 3,000 円、若手 2,000 円、7/31 までの申込は 1,000 円安）
- ・ 懇親会費 6,000 円（7/31 までの申込は 1,000 円安）
- ・ ポスター発表が中心。

会員数の変動 2013 年は、18 人入会（7 人は若手会員）45 人大会。1,186 人に。

会計報告

2013 年度の会計を報告します。

2013 年度会計報告

○収入の部

項目	金額	備考
前年度繰越金	51,407	
2013年度支部交付金・活動助成金	50,250	
例会参加費	6,500	会員8名、非会員3名（学生1名）
預金利子	17	
計	108,174	

○支出の部

項目	金額	備考
支部会報第13号印刷費	57,750	100部印刷
支部会報第13号送料ほか	5,360	原稿、会報郵送料
例会費等	1,100	会場費
事務費	5,132	事務消耗品、引継ぎ送料
その他	1,410	三宅氏立替返金
計	70,752	

○2013年度繰越金

108,174円 - 70752円 = 37,422円

37,422 円は 2014 年度へ繰り越します。

中国支部例会案内

中国支部例会は 11 月 15 日（土）13 時から松江市島根県労働会館 202 号室で行います。

多くの方々の参加をお待ちしています。例会の後、懇親会を予定しています。

2015 年鳥取大会の態勢を考えます。

あとがき

例会へ参加された皆様、ご苦労様でした。次回例会への参加をお待ちしています。ようやく支部会報 15 号ができ上りました。今年度は昨年度よりも早くでき上りました。

次回 16 回例会は、2014 年 11 月 15 日に松江市島根県労働会館で予定しています。多くの御参加をお待ちしています。この会では、2015 年鳥取市で開催をします、全国大会の取組みについて考えたいと思います。

支部会員向け連絡についてですが、経費節約の観点から、できるだけメールで送りたいと思います。アドレスをお持ちの方は、下記事務局へご連絡ください。

皆さんの今年度の活躍を期待しています。

文献紹介

広島県昆虫誌（改訂増補版）

広島県昆虫誌の改訂増補版が発行されます。今回は 5 冊 1 セットの大作のようです。集録種数は、広島県産昆虫 30 目 499 科 9,622 種（絶滅種 8 種を含む）にのぼります。会員の中にもこの対策に関わられた方がおられるのではないかでしょうか。広島県産昆虫と比較するのに最適な本です。値段は 15,000 円（定価）+850 円（荷造送料）です。限定 300 部の貴重本です。この支部報が到着する頃には、もう発行済になっているかもしれません。

役員紹介

支部長：田村昭夫

支部幹事：鳥取県；田村昭夫

島根県；淀江賢一郎

岡山県；岡野貴司

広島県；渡邊一雄、神垣健司

山口県；川元 裕

自然保護委員：鳥取県；田村昭夫（代表）

島根県；淀江賢一郎

岡山県；伊藤國彦

広島県；渡邊一雄

山口県；後藤和夫

日本鱗翅学会中国支部会報

第 15 号

発行日：2014 年 4 月 1 日

編集者：田村昭夫

発行者：日本鱗翅学会中国支部

〒682-0881

鳥取県倉吉市宮川町 2 丁目 74 番地

田村昭夫 方

印刷所：株式会社トライ・エックス

日本鱗翅学会中国支部事務局

〒 682-0881

鳥取県倉吉市宮川町 2 丁目 74 番地 田村昭夫

TEL/FAX:0858-22-7707

E-mail:tanbaya@lime.ocn.ne.jp

日本鱗翅学会中国支部会報 第15号(2014年4月1日)

目 次

支部長挨拶	1
中国支部第15回例会の報告	2-3
発表要旨	
1. 岡山県総社市高梁川堤防のシルビアシジミ 岡野貴司	4-7
2. 山口県で2013年に記録した迷チョウについて 後藤和夫	8-11
3. 鳥取県で初めてのクロマダラソテツシジミを採集(あわせて2013年の島根県の発生状況も) 淀江賢一郎	12-13
4. 山口県のギフチョウ採集自粛のお願い 後藤和夫	14
5. 鳥取県倉吉市の30年間(1981年～2010年)の気温変化 田村昭夫	15-16
6. 日本鱗翅学会2013評議委員会情報 田村昭夫	17
7. 会計報告 田村昭夫	18
あとがき	表紙3
日本鱗翅学会中国支部規約	表紙2

<表紙写真>

2013年10月12日に山口県初記録となるホシボシキチョウを美東町赤郷地区で発見した。追跡調査を直ちに始め、秋芳町青景でも一時発生をしていることを掴み、10月18日も生態観察に訪れた。発生地では♂♀が盛んに飛翔しており、求愛行動をとる個体や、カワラケツメイに産卵する個体も観察できた。訪花性も強く、盛んにこの時期に咲く山野草に吸蜜に訪れた。観察したところ、キツネノマゴに訪花するものが多く、せわしなく盛んに吸蜜を繰り返したが、吸蜜時間は2、3秒程度と短く、撮影のため走り回ることになった。

表紙の写真はその時、キツネノマゴに訪花した本種を撮影したものである。

(後藤和夫)